



一生の計は少壮の時にあり

校長 清水 一司

明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては、輝かしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中は本校教育活動に対しまして、絶大なるご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございました。本年も気持ちを新たに、生徒のためにより一層教育活動に邁進する覚悟しております。本年もよろしく願い申し上げます。

昨年末に毎年恒例の「今年の漢字」が発表されました。2024年を象徴する漢字は「金」でした。「金」が選ばれた理由としては、パリ・オリンピックやパラリンピックに出場したアスリートが数多くの金メダルを獲得したこと、大谷翔平選手が3回目のMVPを獲得するなど値千「金」の活躍があったことなどが挙げられていました。確かにパリ・オリンピック柔道女子の角田夏実選手の豪快な巴投げによる金メダル獲得に始まった日本人選手のメダルラッシュは、今でも強く記憶に残っています。また、パリ・パラリンピックでは、車いすラグビーチームの金メダル獲得への執念に感動したことを覚えています。

そしてメジャーリーグ・ドジャースの大谷翔平選手の超人的な活躍が金メダルのごとく輝いた一年でもありました。メジャーリーグの歴史上、達成者が5人しかいない「40本塁打、40盗塁」の記録を大谷選手は一気に塗り替え、前人未到の「50本塁打、50盗塁」を達成しました。また、2年連続の本塁打王、日本人初となる打点王のナショナル・リーグ2冠に輝き、最優秀選手(MVP)も獲得しました。さらに、ドジャースはワールドシリーズ制覇も果たしました。

この大谷選手ですが、小学校の卒業文集に「野球で全国大会に行く」と書いていたそうです。そして高校時代に甲子園大会に出場しています。高校生時には「人生設計シート」を作り、「20歳でメジャー昇格」「26歳でワールドシリーズ制覇」などと記し、その多くを現実のものとしています。現在の活躍は、少年の頃の誓いが支えとなっているのでしょう。

少年の頃の誓いが現実のものとなっている例は少なくありません。パリ・オリンピック男子スケートボード金メダリストの堀米優斗選手は小学校の卒業文集に「ぼくの夢は、世界で一番うまいスケーターになること」と書いています。また、フェンシング男子フルーレ団体金メダリストの永野雄大選手は「ぼくの将来の夢は、フェンシングのオリンピック選手になること」と書いています。

「一生の計は少壮の時にあり（「一生の計画は若い時に立てるのが良い」という意味）」という言葉があります。数多くのオリンピック・パラリンピアンや大谷選手が少年の頃に将来の夢を誓ったように、生徒たちにも新たな年を迎えた節目の時に、それぞれが描く「人生の金メダル」を目指して将来の夢を誓ってもらいたいと考えています。